

バトン

## 私の大切なカーディガン

5年 S・Yさん

「フーン、この服にはやっぱりこのカーディガンかな」

私は毎晩欠かさず明日着る服のコーディネートを考えている。

私は祖母、母、そして私と受けつがれているピンクと白のボーダーのカーディガンを持っている。

しかし、正直に言ったら私はこのカーディガンが大好きというわけではなかった。なぜなら、私は黒が好きなのにピンクと白という「サ・女の子」のような色合いのカーディガンだからだ。

なので私は今までこのカーディガンをクローゼットの奥にしまっていた。

しかし、この物語を読んでカーディガンへの思いが一変した。物語に出てくる病気で死んでしまった「カオル」のひな人形と、私の祖母が残したカーディガンが重なって見えてきたからだ。

カーディガンは「バトン」に出てくるひな人形のような、家族のつながりを感じられる大切なものだと思付いたのだ。

そして、「いまそこに見えている人やものは、過去につながり、そして、未来にもつながっていく」という圭の言葉に心を動かされた。

私の祖母は若くして、病気で死んでしまい私は一度も会ったことがない。やさしそうな祖母の写真を見る度にずっと会いたいと思っていた。今まではカーディガンを羽織っても何も感じなかったが、この物語を読んでからはカーディガンを羽織ると不思議と祖母に抱きしめられているような気がして、とてもうれしくなる。

だから、クローゼットの奥なんかに入らずに、圭のひな人形のように大切にしよう。私が母になったら自分の子供にも着せてあげよう。私はそう思った。

そして、できることなら私は圭とひな人形とカーディガンを見せ合って笑いあいたい。

「よしっ決めた！ 明日はピンクのTシャツとこのカーディガンを黒いズボンで引き締めようっ！」